

トリック的なプロテスタントに近いものであり、その新聞の影響力ともあいまって、後にベネットはヒューズから「危険人物」として名指しで批判を受けることになった。

ベネットと『ヘラルド』の存在は、当時より一層の重要性を持ちつつあった世俗のジャーナリズムという領域が、宗教を単にニュースとして取り扱うのみならず、その社会における意義や役割などを論じる場として働いていたことを示す好例であるといえる。また、その立場は、教派ごとの対立の構図が未だ濃厚であった十九世紀前半において、プロテスタントにも、カトリックにも過度に同一化することのない独自のものであり、当時の合衆国における、人々と宗教の関わりの一つのあり方を示している。

現代日本社会における宗教と暴力

——オウム真理教と「すぴこん」——

橋 迫 瑞 穂

一九九五年にオウム真理教が引き起こした地下鉄サリン事件は、宗教が暴力を社会に向けて露わにしうることを示した事件として人びとに受けとめられた。ところが、二〇〇〇年代に入ると、「スピリチュアル・ブーム」という形で新たな宗教ブームが多くの支持者を獲得するようになった。「スピリチュアル・ブーム」は、実際には八〇年代の宗教ブームを引き継いだもので、オウム真理教とともに島蘭進のいう新霊性運動・文化

の流れを汲むものである。このように、「スピリチュアル・ブーム」はオウム真理教と同じ系譜に属しながら、今のところ突出した暴力事件を起こしてはおらず、暴力の点でオウム真理教と対照的な位置にあるのはなぜだろうか。この点を明らかにするには、オウム真理教による突出した暴力事件の担い手は主として男性幹部信者であったのに対して、暴力をあらわにしている「スピリチュアル・ブーム」ではもっぱら女性たちが中心的な担い手であることに注目する必要がある。このような観点にたつて、本発表は、新霊性運動・文化を共通の母胎としながらも、暴力の点で対照的なオウム真理教と「スピリチュアル・ブーム」を、それぞれの宗教における女性と男性の意識の相違に注目して、比較することで、現代日本社会における宗教の暴力について検討することを目的とする。

オウム真理教の男性信者らの手記からは、自らの存在への不安に対して、教団での修行は救いをもたらすものと受けとめられていたことが伺われる。だが、その修行は、自らに暴力を加えることにはかならず、そこに暴力の萌芽を認めることができる。さらに、男性信者らは教祖麻原を中心とする新しい「世界」の創出にも向けられていた。地下鉄サリン事件をはじめとするオウム真理教の暴力事件は、明確な「敵」を自分たちの外に設定し、暴力を向けることで、その新しい「世界」の創出を目指すものだったのである。女性信者たちも男性信者たちと同様に、「私」の創出を求めて修行に没頭したが、彼女たちは、新しい「世界」の創出には関心が薄く、教祖麻原にもそれほど魅了されていなかった。「スピリチュアル・ブーム」に集う女

性たちも、その代表的イベント「すぴこん」で見られるように、宗教色の強いセッションを購入することで、新しい「私」が創出されるのを期待しつつ、新しい「世界」の創出への関心は持っていない。だが、彼女たちはさらに、オウム真理教の女性たちとも異なり、他の商品と比較する「品定め」や、「スピリチュアル」に関心をもつ人びとと交流する「社交」を楽しむことに魅力を見出していることが、彼女たちへのインタビューから伺われる。「スピリチュアル・ブーム」もオウム真理教と同様に、暴力を胚胎しながら、オウム真理教とは異なって、それが常に昇華されるのは、「品定め」と「社交」という彼女たちにとっての魅力が、安全装置として機能しているからなのである。

以上、オウム真理教と「スピリチュアル・ブーム」のいずれも、そこに集う人びとは新しい「私」の創出を期待しており、それが暴力と結びつく契機となりうる点で共通していることが指摘される。だが、オウム真理教の男性を中心とする幹部信者たちは、新しい「私」の創出だけでなく、新しい「世界」の創出をもオウム真理教に期待し、それが外部に向けた暴力に結びついた。それに対し、オウム真理教と「スピリチュアル・ブーム」の女性信者たちは、新しい「私」の創出に没頭する反面、「世界」の創出には関心が薄く、暴力を対外的に表出する理由を持たなかった。さらに、「スピリチュアル・ブーム」の女性たちは、「社交」と「品定め」の楽しみという、別の魅力をも見出している。そのことによって、彼女たちは、宗教をたえず日常生活の文脈に引き寄せ、モノ化し、消費しており、それによって宗教の暴力を回避していると考えられるのである。

予言が当たったとき

——アセンション信奉者の震災後の態度——

堀江 宗正

スピリチュアルなものに関心を持つ人々の間で「アセンション」という観念が注目されている。アセンションは、地球という生命体・意識体の次元上昇、個人の魂の進化を指す。進化しない魂はこの古い世界に残るとされる。ここでは、地球の不調和な部分の浄化作用、災害や戦争が起こるという。時期は、マヤ暦が終わる二〇一二年一月二二日とされてきた。最近では、二〇一一年一月二八日が暦の終わりだとする計算もあり、その最後のサイクルが始まる同年三月九日から、何かが起こると考えられてきた。また、アセンションは霊性の高い日本から始まるという説もあった。そこに起きたのが東日本大震災である。

本発表では、アセンションと地震を関連づけるようなブログから、震災への反応の傾向を明らかにする。震災後、「天罰」発言批判や「不謹慎」言説が強まり、震災の宗教的意味づけがタブー視されている。アセンションはそのなかでどのように信じられているのか。また終末論と個人的スピリチュアリティの系譜のなかにどう位置づけられるだろうか。

まず次の条件でブログを絞り込んだ。ニュージーランド地震の二月二二日から東日本大震災前日の三月一〇日までの期間指定で「アセンション 地震」の検索語でヒット、内容的に地震